OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A Contrastive Study of Japanese Compound Verbs and English Phrasal Verbs : Building Toward a Typology of Linguistic Construal Operations Involved in Processes of Semantic Extension
Author(s)	Moehle, Ashlyn Michelle
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59634
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　MOEHLE Ashlyn Michelle　）	
論文題名	A Contrastive Study of Japanese Compound Verbs and English Phrasal Verbs: Building Toward a Typology of Linguistic Construal Operations Involved in Processes of Semantic Extension （日本語の複合動詞と英語の句動詞の対照研究―意味拡張に関わる認知操作の類型の構築へ向けて―）

論文内容の要旨

本論文では、英語における out を含む374の句動詞を翻訳及び定義するのに使用される日本語の述語を考察する。英語の句動詞とそれに対応する日本語の述語のペアを抽出し、それを日本語の述語の種類によって7つのカテゴリーに分類する。それに基づいて、 out の多義的ネットワークにおける複数の関連した意味の中で、どの意味が「出る」又は「出す」を用いて表現が可能かの検討を行い、 out で表現されるいくつかの意味領域が「出る/出す」では表現されないことを明らかにする。このような意味拡張のあり方の違いは out のそれぞれの用法を基盤となりそれを動機づけるイメージスキーマの変化に由来することを示す。最後にそのイメージスキーマに起きる変化は特定の認知操作が適用されることによって生じるということを論証する。ここで述べる認知操作とはある事象を言語で表現するために行われるプロセスであり、特に話し手によるその事象の捉え方についての情報を伝達する手段として定義されている(Croft and Cruse 2004)。本研究では、このような意味拡張に関わる認知操作の観点から言語の類型的特徴を分析する枠組みを作るための基礎を提供することを試みる。

句動詞とは動詞と前置詞、副詞、不変化詞（まとめて小辞と呼ばれるもの）が組み合わされた構文を指す。Lindner（1983）は point out や tie up などのような句動詞を1,800件分析し out と up が句動詞の意味へどのように貢献しているかを考慮しながら out と up の多義的ネットワークを明らかにしている。Lindner の分析に基づき、本論文では out の多義的ネットワークを日本語の「出る」と「出す」のそれと比較し、意味拡張のあり方に関する共通点と相違点を明らかにする。out の諸用法を「出る／出す」の意味と比較するために、英語における句動詞と日本語における複合動詞、それぞれ二つの構文において out と「出る/出す」がどのような意味で使われているかを考察する。

第１章では本論文の目的を述べ理論的な方向性を示す。本論文では、意味拡張に関する様々な現象を分析する際に、認知言語学の方法論に従う立場を取る。第1章の後半では論文概略について述べる。

第２章前半では英語における句動詞の先行研究を参照しながら、句動詞と形式的にそれに類似する構文を区別するために使われる統語的な基準を紹介する。第２章後半では本論文における句動詞の分類を再定義する。本論文で扱う句動詞の分類は Lindner（1983）の verb-particle construction（動詞−不

変化詞構文)の分類と大部分重複しているが、Lindner とは異なり break out of a bad habit のような of を主要部とする前置詞句を補部として取る out の句動詞も考慮に入れる。

第３章では近年の日本語における複合動詞についての主な文献を再検討する。テ形複合動詞と区別する基準を紹介した上で、「統語的」「語彙的」という二つの種類の複合動詞を区別するための基準を検討する。その上で、語彙的複合動詞を（句動詞と共に）特定の文法形式として、本論分の対照分析の対象とする。

第４章では英語の句動詞と日本語の複合動詞の対照研究が可能となる根拠について論じる。まず、これらの構文が Talmy（2000）の移動表現の類型の中で特徴づけられることを主張する。Talmy は移動という出来事が成り立つために必要な要素と、それがどのように具現化されるかを調査し、移動動詞の語彙化の類型を提案している。 それに基づいて、ある言語において『様態』『経路』『移動』という三つの意味的な要素を同時に表す場合、経路が動詞に融合して表現される場合と動詞以外の要素によって表現される場合があることを論じる。前者は verb-framed language、後者は satellite-framed language と呼ばれており、日本語と英語はそれぞれの代表的な言語である。それぞれの言語において複合動詞と句動詞は同様に『様態』『経路』『移動』という移動事象における三つの意味要素を同時に表現する手法として共通している。さらに Talmy の類型論は移動事象に限らず状態変化など様々な複雑事象に適用できるとされている。英語の句動詞と日本語の複合動詞を明示的に比較する研究は数少ないが、代表的な研究を二つ紹介する（Taniwaki and Tono 2009、Kageyama 1999）。最後に out を含む句動詞と「出る／出す」がV2として現われる語彙的複合動詞に検討の焦点を絞る。out も「出る」も基本義で表される空間における外部への移動という意味が容器スキーマに由来することを論証する。「出る」が複合動詞のV2として機能する場合「出る」が単独動詞として機能する際の意味と概ね同じ意味を表わしていると Himeno（1999）は述べている。さらに、多くの場合、V2の「出る」とV2の「出す」は相互置換可能である。これらの根拠に基づき、句動詞における out と語彙的複合動詞における「出る／出す」の間の意味的な対応を規定することができる。

第５章では out の句動詞とそれに対応する日本語の述語を1,957のペアで分析した結果を紹介する。まず、データの引用元と収集する方法を紹介する。対応ペアは「出る／出す」が何らかの形で含まれているか否か、さらに、ここで扱う日本語の述語の種類によって７つのカテゴリーに分類される。分析の結果として「出る／出す」以外の単独動詞が最多のカテゴリーであり対応ペアの50.8%を占めることを示す。複合動詞は全体の23.6%を占め、その半分（11.8%）が「出る／出す」がV2として現われる複合動詞である。この結果は第４章の前半で論じた対応とは一致しておらず、そのような結果がなぜ生じたかについて検討する。第一に、対応ペアの分布に影響を与える理由としてイディオム表現と日本語の述語に前置される要素を事例と共に挙げる。最後に最も頻出する日本語の単独動詞と複

合動詞のV2を列挙し同義であるが「出る／出す」によって表現されない句動詞 のグループがいくつかあることを指摘する。

第６章では、第５章の終わりで指摘された残りの非対応ペアについて触れる。非対応ペアとは「出る／出す」が単独動詞、複合動詞のＶ２、あるいは漢語における「出」という形で登場していない述語を指す。第５章の検討では説明できない非対応ペアは全て偶然生じたわけではなく、むしろその多くがoutの拡張した意味での用法であるのに対して「出る／出す」の意味がそこまで拡張していないためであることを主張する。再帰型（reflexive type）、「接近不可能化」型（change to inaccessibility type）、詐取型（bamboozle type）という三つの「出る／出す」によって表現されない out を含む句動詞の分類を挙げる。第４章では out と「出る／出す」の基本義は共通で空間的な外部への移動を表わし、いずれの場合も容器スキーマというイメージスキーマに基づいていることを示したが、本章で挙げる各類型での out の意味は容器スキーマにおける根本的な変化から生じることを議論する。さらにこの変化は「総括スキャニングと順次スキャニング」や「視点」などの認知操作による変化であることを主張する。例えば「接近不可能化」型に関して言えば、 Lindner（1983）に述べられているように out に見られる「接近可能化」の意味の基となるイメージスキーマにおける「視点」の変化によって「接近不可能化」の意味が派生する。「接近可能化」の意味は Hiratsuka and Imai（2000）が単独動詞「出る」の意味用法の一つとして提示しており、「認識、知覚、コミュニケーションなどが可能になること」を表すような状態変化として定義されている。複合動詞後項の「出る／出す」についても Himeno（1999）が「表だった場への出現」「顕在化」として挙げている意味用法がそれに当たると考えられる。すなわち、単独動詞の「出る」に見られる「接近可能化」の意味が複合動詞後項（V2）の「出る／出す」にも見られると考えることができる。したがって、「接近可能化」のみについては、英語の out についても、日本語の複合動詞後項「出る／出す」についても同様に存在することが分かる。このことは、「外部への移動」から「接近可能化」への意味拡張が日本語にも英語にも見られる共通のプロセスであるということを示している。しかし、 Lindner は out に関して「接近可能化」という意味の一方で、接近可能であったものが接近不可能になることを表す out の例も見られることを指摘している。一方、「出る／出す」の意味には「接近可能化」しかない点で out とは異なっている。

（１）接近可能化

The writer kept grinding out more stories until the magazine agreed to accept three of the best ones.

その作家はさらに続々と作品を作り出し、ついにその雑誌は最も優れたものの中から３作を掲載することに同意した。

（2）接近不可能化

Grind out your cigar.

葉巻をもみ消して下さい。

(Kenkyusha-Longman Dictionary of Phrasal Verbs)

このように英語の out を含む句動詞と「出る／出す」を後項とする日本語の複合動詞に見られる意味拡張のありかたの違い（「接近不可能化」の意味の有無）は out の「接近可能化」の意味の基となるイメージスキーマにおける「視点」の取り方の違いによるものであると主張してきたが、「視点」とは何を指しているか Linder では明確にされていないことを指摘する。

最終章では、out と「出る／出す」の意味拡張のあり方の違いは out の多義的ネットワークに現われる新しい用法を創出する認知操作に由来するという主張がどのような含意を持つかについて述べる。Croft and Cruse（2004）は「視点」を認知操作の一つとして挙げているが、認知操作に関わる「視点」と Lindner が用いている意味拡張に関わる「視点」はどのように関係しているのかが明らかではない。しかし、「接近不可能化」型の句動詞とともに再起型（reflexive type）、詐取型（bamboozle type）の句動詞の意味も out の意味の基盤となる容器スキーマにおける変化を及ぼすあらゆる認知操作に由来すると考えられる点では、意味拡張に関わる認知操作が様々な言語においてどのように出現し作用しているかをより体系的に記述するための枠組みが必要であると考えられる。意味拡張の過程を促進する上で重要な要素である認知操作がどのように言語の中で、あるいは様々な言語に渡って互いに作用するかという現象の理解を深めることに貢献できる研究が今後の課題である。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名	(MOEHLE ASHLYN MICHELLE)	
	(職)	氏　名
論文審査担当者	主 査　教授	今井　忍
	副 査　教授	堀川　智也
	副 査　准教授	早瀬　尚子
	副 査　教授	岸田　泰浩
	副 査　准教授	山川　太

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語の複合動詞と英語の句動詞の間の対応関係を意味拡張という観点から論じた研究である。両者の間に何らかの関連性があることはこれまでも散発的に指摘されてきたが、それぞれの意味的・統語的特徴を認知言語学を基礎に据えた一定の理論的枠組みの中で統一的に説明しようとする試みはこれまでにない野心的なものと言える。

導入的役割を果たす第１章に続き、第２章、第３章では、それぞれ英語の句動詞、日本語の複合動詞に関するこれまでの研究が概観される。いずれの構造についても膨大な先行研究があるが、主要な研究を挙げて研究史を概観しつつ、その中での本研究の立ち位置を明らかにしている。特に、句動詞について、どの研究でも排除されている*break out of the habit*のような*out of* ～を含む形式を含めることでより広い視野での考察を可能にしている点が特徴的である。

第４章では、それぞれの構造をTalmyの移動動詞の類型論において同等のものとして位置づけられると指摘している。Talmyは移動を表す際に必須の要素として「様態」「経路」「移動」を挙げているが、この３つの要素を一つの動詞で表すことはできず、「経路」は「移動」と融合して動詞として表現されるか、動詞以外の要素として表現されるかのいずれかであるという一般化を行っている。申請者は、日本語の複合動詞と英語の句動詞が、これら３つの要素を一つの節内で同時に表現する手段として共通していることを指摘している。また、Talmyがこの一般化が単に物理的移動の表現だけでなく状態変化についても成り立つと述べていることを踏まえ、句動詞における小辞と複合動詞後項の拡張された用法に対しても比較が可能であると主張している。

第５章では、前章までに導入された枠組みに基づいて、英語の*out*を含む句動詞が日本語の「出る／出す」を後項とする複合動詞に対応するという仮説を立ててそれを検証している。申請者の調査は『三省堂　英語イディオム・句動詞辞典』から英語の*out*を含む句動詞とその日本語訳のペア1,957を抽出し、それが「出る／出す」を後項とする複合動詞と対応するかどうか、対応しない場合にはどのような形式と対応するかを調査・分類するものである。その結果、i) *out*を含む句動詞の50.8%が「出る／出す」以外の単独動詞と対応する、ii) 全体の23.6%が複合動詞と対応し、その約半数（11.8%）が「出る／出す」を後項とする複合動詞と対応する、ということを明らかにしている。申請者は、このような非対応、すなわち、*out*を含む句動詞と「出る／出す」を後項とする複合動詞が必ずしも対応しているわけではないことについて考察し、それらの一部がイディオム表現との対応、および、副詞的要素や接辞を使った表現との対応により生じていると主張している。

第６章では、それ以外の非対応例が、*out*の意味拡張と「出る／出す」の意味拡張のあり方の違いによって説明されている。*out*と「出る／出す」の基本義はともに容器スキーマというイメージスキーマによって表されるが、*out*の意味が基本義以外に再帰的トラジェクター、接近不可能化、詐取、という３つの意味に拡張しているのに対して、「出る／出す」はそのような意味を体系的に欠いていることが明らかにされている。さらに、そのような意味拡張のあり方の違いが、*out*と「出る／出す」の時間的プロファイルの違い（総括スキャニングと順次スキャニング）、及び、語彙的意味における視点の

置き方の違いによるものと分析されている。

第７章では、全体の主張を総括するとともに、それがどのような帰結を持つかが述べられている。従来の研究では認知操作（construal）において視点が重要な位置を占めているとされているが、本研究における考察から、談話的な視点以外にも語彙的意味の拡張に関わる視点を考慮する必要があり、認知操作としての視点の更なる体系化が必要であると述べている。

本研究の学術的貢献は以下のようにまとめられる。まず、英語の句動詞について、統語的特徴に基づく詳細な分類が乱立する中で、より広い解釈をとることで日本語との対照を可能にし、新たな分析の可能性を示した点が挙げられる。次に、英語の句動詞と日本語の複合動詞をTalmyの移動動詞の類型論を使って同等のものと捉えた点も特筆に値する。「様態」「経路」「移動」の３つの要素を同時に表現する手段は必ずしもこの両構造だけではないため、完全な一対一対応になっているわけではないが、これまで直感的にしか捉えられてこなかった両構造の共通性に対して理論的な基礎づけを与えた点は高く評価できる。さらに、*out*と「出る／出す」の意味拡張のあり方の相違の背後に一定の規則性を見出している点も重要である。その帰結の一つである、*out*の詐取型用法が日本語の「取る」「上げる」に対応するという事実は、本研究のような分析の枠組みを設定して初めて明らかになったことであり、この方法が新たな言語事実を発見するための極めて有効な手段であることが示唆されている。

その一方で、第６章における再帰トラジェクターのスキャニングによる分析にはやや疑問の残る点がある、接近不可能化への意味拡張における視点の置き方の違いが生じる理由が明確にされていない、など、分析にやや不十分な点が見られること、データが辞書という特殊な資料に限られていること、論述に散漫で分かりにくい点があること、などいくつかの不備があるのも確かである。しかし、そのような不備は些細なものであり、本研究が、これまでそれぞれに多くの研究があり、その間の繋がりが指摘されながらも体系的な研究がなされてこなかった英語の句動詞と日本語の複合動詞の対照研究に確固とした基盤を与え、具体的な研究の方向性を示したという点については評価してもしすぎることはない。

以上の審査結果を踏まえて、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断し、審査委員会全員の一致により合格という結論に至った。